

東京外国語大学附属図書館  
第12回特別展示



『コドモノセカイ』日本語教育振興会編 黒崎義介画 1942年より

# 戦前・戦中・占領期 激動の時代の日本語教育

なおえ  
長沼直兄の仕事を中心に

「戦前・戦中・占領期日本語教育資料」が、学校法人長沼スクール東京日本語学校から寄贈されました。激動の時代に国内外で用いられた日本語教科書・教材等 286 点です。国策と日本を取り巻く国際社会が大きく変わるなかで日本語教育への変わらぬ情熱を注ぎ続けた長沼直兄(1894~1973)の仕事を中心にコレクションを紹介します。



上：『ガクカウ』山本日子士良画 昭和 17 年

下：『ニッポンノタテモノ』鈴木寿雄画 昭和 17 年



## ごあいさつ

東京外国語大学附属図書館では、毎年秋に特別展示会を行い、当館の所蔵する資料の数々をさまざまな切り口から紹介し広く社会に公開しております。

府中キャンパス移転後、特別展示第 12 回を数える本年は『戦前・戦中・占領期 激動の時代の日本語教育』と題して、このたび学校法人長沼スクールより当館に寄贈された「戦前・戦中・占領期日本語教育資料」を日本語教育者・長沼直兄の仕事にスポットを当てながら紹介します。

国内外で日本語教育に用いられたこれらの資料を前に、この激動の時代の日本語教育で変わったもの・変わらぬものを目にしながら、外国語話者へ日本語を教えることの意味に改めて思いを巡らせていただけるなら、主催者として喜びに堪えません。

展示にあたり、河路由佳 本学大学院総合国際学研究院教授（日本語教育学）にご指導と解説文を賜りました。河路先生にはあわせて公開講演会をお願いしております。

また、学校法人長沼スクールには御寄贈に加えて資料の貸与をいただき、本学国際日本研究センターにはコレクションの受入・電子化にあたり協力をいただきました。

これらの皆様に厚くお礼申し上げます。

2011 年 11 月 18 日

東京外国語大学附属図書館長

栗田 博之

### 展示

- 期間 2011 年 11 月 18 日(金)～12 月 25 日(日) (11/19,20,23, 12/23 を除く)
- 場所 東京外国語大学附属図書館 2F ギャラリー
- 時間 平日 9:00-21:45 (11/18,21,22,24 は 17:00 まで), 土日 13:00-18:45  
※入館は終了 15 分前まで

### 公開講演会

- 講師 河路由佳 (本学教授)
- 演題 アメリカ・日本・アジアのはざままで 日本語教育者・長沼直兄の「激動」の戦前／戦中／戦後
- 日時 12 月 9 日(金)16:00-17:30 研究講義棟 101 教室

# 展示資料解説

\* ()内に展示資料一覧(p.13-14)の  
資料番号を記した

本学教授 河路由佳  
(日本語教育学)

このたび東京外国語大学に学校法人長沼スクール(旧:財団法人言語文化研究所)より「戦前・戦中・占領期日本語教育資料」が寄贈された。国内外で用いられた日本語教科書・教材等 286 点の書籍は附属図書館に、書籍以外の一次資料は本学国際日本研究センターが寄贈を受けた。(財)言語文化研究所(2009 年度より改組改称され学校法人長沼スクール)は、1941 年 8 月に文部省内に設立された日本語教育振興会の財産をひきついで 1946 年 3 月に長沼直兄によって設立され、長沼直兄の著作を含む戦前・戦中・戦後の資料を保管してきた。本コレクションを通称「長沼直兄文庫」と呼ぶ所以である。

このコレクションは大きく分けて次の二種類から成る。

A : 1941 年 8 月に文部省内に設立された日本語教育振興会(1941-1946)の出版物はじめその蔵書やその他の一次資料。

B : 長沼直兄の米国大使館日本語教員時代(1923-1941)や占領期の米軍将校らへの日本語教育関係、戦時でも日本語教育振興会とは別の活動として出版した本など、長沼直兄に関わる A 以外の出版物やその他の一次資料。

日本語教育振興会は「大東亜圏内における日本語普及」のための調査研究、教材作成、教員養成などを統括的に行なう機関であったから、A の日本語教育振興会による出版物は、アジア向けのものである。戦後の日本語教育に大きな影響を与えた長沼直兄の著作も含まれる。統括的機関であったことから、同時代の日本の内外各地の日本語教科書など日本語教育関係の書籍が集められており、コレクションにはそれらも含まれている。

B は、米国大使館での日本語教授から生まれた長沼直兄『標準日本語讀本』(1931-1934)を中心に、戦時中の米国におけるその複製本や戦後の改訂版など。また、戦時中に日本語教育振興会とは別に長沼直兄が著した『First Lessons in Nippongo』、そして占領期に米軍総司令部参謀第二課日本地区語学科の日本語主任を務めた時期の長沼直兄の著作など、戦前・戦中・戦後の長沼直兄に関わる A 以外の蔵書や一次資料である。特に『改訂標準日本語讀本』は戦後、日本の内外で広く使われ、大きな影響を及ぼしている。

今回の展示会は、〈戦前・戦中・占領期 激動の時代の日本語教育― 長沼直兄の仕事を中心に〉と題して、A から日本語教育振興会で長沼直兄がかかわった出版物、B から長沼直兄の米国大使館日本語教官時代の名著『標準日本語讀本』シリーズを中心に構成した。

ケース 1 から 4 までは A より日本語教育振興会の出版物をほぼ時代順に並べ、ケース 5、6 には、B より日本語教育振興会とは別の長沼直兄の著作を、『標準日本語讀本』関係の出版

物を中心に並べた。そして最後のケース7には、A より長沼直兄が直接関係していない同時代の日本語教材のうち特色あるものを選び、同時代の多様な教材の一部を紹介した。

大半が今回附属図書館に寄贈された書籍だが、ケース5のハロルド・E・パーマーによる自筆原稿、長沼直兄の自筆ノートは、国際日本研究センターに寄贈された資料よりの出展で、ケース2のレコードは長沼スクールよりお借りしたものである。

本展示会にあわせて、12月9日に〈アメリカ・日本・アジアのはざままで～日本語教育者・長沼直兄の「激動」の戦前／戦中／戦後〉と題した講演会も予定している。長沼直兄は、生涯を通して日本語を教えると同時に調査研究、教材開発に取り組み、今日の日本語教育の基礎を築いた。私たちはもう長沼直兄に会うことはできないが、残された資料には、新たに出会うことができる。展示会を通して新たな出会いを経験していただけたらと思う。

## ケース1

**1** 『ハナシコトバ 上』 文部省 昭和16年(?)



**5** 『日本語讀本卷二』 日本語教育振興會 昭和17年



日本語教育振興会は、まず民間の日語文化学校内に置かれたが、改めて文部省内に設置されたのは、1941年8月であった。大陸の学童向けの日本語入門書『ハナシコトバ』(1)(2)(3)は、既に東亜同文会によって初版が発行されていたが、日本語教育振興会設立後は、同振興会がその刊行を引き継いだ。作成したのは文部省の勅令によって設けられた「日本語教科用図書調査会」であった。1939年より文部省囑託であった長沼直兄は、この作成時から意見を述べたという。B6判の薄型、オールカラーの絵本風の作りで上・中・下の3巻から成る。絵は、授業用に大きく引き伸ばされた「掛図」も作成された。全体にことばは少なく、特に上巻の初め、4～8ページは絵だけで文字がない。

一カ月程度の研修を受けて現地に赴いた6,000人を越える日本人日本語教員は、絵本のような教科書を与えられただけでは途方に暮れたに違いない。彼らのために、この教科書には、懇切丁寧な「指導書」(4)が作成された。『ハナシコトバ』の1ページのために、指導書は5

～6 ページ、直接法での授業の進め方がシナリオのように書き込まれている。執筆者は長沼直兄である。

媒介語を使わずに直接、日本語で日本語を教える「直接法」は、母語の習得過程の観察から提唱され、この時期はこれが最もよい方法だとされていた上、派遣教員は現地語が必ずしもできなかったため、現実的でもあった。留学生教育の現場でも、直接法のバイブルとしてこの「指導書」は用いられた。戦後も特に日本国内の日本語教育においては直接法が主流だが、その原型がここにあると言える。

この三冊を終えたレベルのものとして、同じく学童向けに『日本語讀本』(5)が巻一から順に作成された。これらにもやはり丁寧な指導書(6)がついている。前頁に示したのは、巻二の「第九課 道順」の部分である。

## ケース2

文部省・興亜院の指導の下、日本語教育振興会がまず力を入れてとりくんだのは大陸向けの日本語普及であった。学童に向けた学校教育を通しての日本語教育は、将来日本語を「大東亜の共通語」にしてゆくための重要な基礎となるもので、徹底して行われた。特に、目標とされたのは多くの人が生活の中で日本語を使うようになることで、『ハナシコトバ』(1)(2)(3)は、まず口頭語としての日本語を扱い、読み書きは、そのあとに導入されることになっていた。子どもたちは、絵をみながら繰り返し日本語を聞き、日本語を話すことが求められた。当時、普及すべき日本語は、「標準語」で、規範的な発音、アクセントを最初から提示することが大切であった。日本語教員養成研修においても「発音」の実習は、標準的な発音・アクセントの訓練であった。

しかし、このことからわかるように、実際に大陸に赴いた日本人日本語教師が必ずしも標準的な発音・アクセントの使い手であったわけではない。

5枚セットのレコードは、標準的な発音・アクセントの模範を示すために作成された。『ハナシコトバ』全三巻の本文すべてが録音されている。添付の冊子では教科書本文にアクセント記号が付され、レコードによる学習の必要性が強調されている。このレコード一式は今回の展示会のため学校法人長沼スクールより借り受けた。展示では、ヘッドフォンで音声を聴いていただけようにした。

当時の日本語普及の理念は、大東亜の隅々まで、すべての人に普く届くようにというもので、障害者教育についても調査・研究が行なわれていた。この『ハナシコトバ』の点訳版(7)は、1942年に、上・中・下が作成されている。点訳者は板倉正一。点訳版は、この1セットのほかには確認されていない。また、必ずしも使用された形跡は認められない。ほかに何部作成され、どのように使われたのかは不明である。

## ケース3

8 『コドモノセカイ』 黒崎義介画 1942年



9 『ニッポンノタテモノ』 鈴木寿雄画 昭和17年



10 『ガクカウ』 山本日子士良画 昭和17年



長沼直兄と文部省とのかかわりは、1923年に長沼直兄が文部省内の英語教授研究所の職員になったことから始まる。20代の終わりのことであった。民間の日本語学校である日語学校で臨時教師として宣教師に日本語を教えていた長沼直兄は、文部省の英語教育顧問として英国より招請されたハロルド・E・パーマーと1922年に出会った。長沼直兄がパーマーに日本語を教えると、パーマーはその教え方について逆に長沼直兄を指導したのだというが、優れた英語の使い手でもあった長沼直兄に、パーマーは大きな信頼を寄せるようになった。文部省内に英語教授研究所ができ、パーマーが所長となったとき、長沼直兄はその職員となり間もなく委嘱研究員となった。長沼直兄はパーマーの英語教育の講習会や英語教材の作成を手伝った。パーマーは1936年に帰国。その後、長沼直兄は1939年に文部省の日本語教科書編集の嘱託に任命され、1941年8月に文部省内に日本語教育振興会ができるとその理事に就任、1946年の夏に同振興会が解散するまで（それを決定したのも長沼直兄である）、特に教科書を始めとする出版物の責任者として、日本語教育振興会による出版物の計画から発行までを担当した。

「支那学童用絵本」シリーズは、日本語教育振興会によって1942年に中国向けに発行された。今回はそのうちの3点を展示し、フォトフレームでほかのページが見られるようにした。日本の文化や日本語に好意と憧れを持ってもらおうという意図から上質であることが求

められ、当代一流の絵本作家に依頼された。『コドモノセカイ』(8)は黒崎<sup>よしすけ</sup>義介、『ニッポンノタテモノ』(9)は鈴木<sup>としお</sup>寿雄、『ガクカウ』(10)は山本<sup>ひこしろう</sup>日子士良による。青年学習者のためには「日本文化読本」シリーズが計画された。『年中行事』(11)『大学の學生生活』(12)『さくら』(13)はそれで、同じく1942年に刊行された。

## ケース4

**17** 『学習日本語フィリピン篇 1』  
文部省 昭和19年



**19** 『学習日本語ビルマ篇 2』  
文部省 昭和19年



**21** 『学習日本語マライ篇 3』  
文部省 昭和20年



1942年になると、ビルマ、ジャワ、マライ、フィリピンなど、南方占領地向けの出版物に重点が移される。『ニッポンゴ』は、情報局が編纂し、日本語教育振興会が発行した。情報局は1940年12月に設置され、日本の対外的な文化事業を統括的に担当していた。『ニッポンゴ』は、日本語の基本単語を分類別に整理して、カラーのイラスト入りで並べたものである。この基本300語の選定には、西尾実、石黒修らとともに長沼直兄も委員の一人として参加した。巻末の付録に、「カ」をつけると疑問文となる（「ビョーキカ」「イーカ」「クルカ」など）などと、「簡易日本語」の指南が書かれているのも特徴的である。『ニッポンゴ』には「半島マレー語」（マレーシア語）(14)「島嶼マレー語」（インドネシア語）「安南語」（ベトナム語）「タイ語」「ビルマ語」「タガログ語」(15)、それぞれの対訳付きのものが発行された。

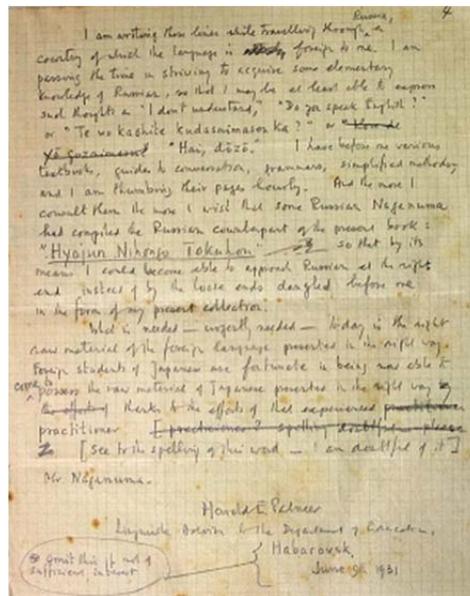
ほかに、ジャワ(16)、フィリピン(17)、ビルマ(18)(19)、マライ(20)(21)それぞれに向けて定期刊行物として『学習日本語』が計画され、1944年5月に「1」、7月に「2」、1945年2月に「3」が出版された。日本語だけの冊子であるが、毎号二つの本文からなり、最初のものは共通、二番目のものはそれぞれ現地に材をとった文章である。たとえば、「1」では、共通教材は「少年飛行兵」、二つ目の教材としてジャワ篇では「サレム爺さん」、フィリピン

篇では「新生のフィリピン」、ビルマ篇では「ビルマの青年」、マライ篇では「南の青年への手紙」となっている。毎号表紙を開くと同じ前書きがある。「この『<sup>がくしふにつほんご</sup>學習日本語』は、<sup>みなみ</sup>南の<sup>につほんご</sup>国のみなさんのお友達として、<sup>くに</sup>新しくできた本です。(中略) <sup>だいてうあ</sup>みなさん、<sup>みんぞく</sup>いつしよに日本語をならつて、<sup>にんげん</sup>大東亜の民族としてはづかしくない人間になりませう」とある。奥付には発行の代表者として長沼直兄の名前が見える。

## ケース5

※訳文と解説は  
p.10 に掲載  
してあります

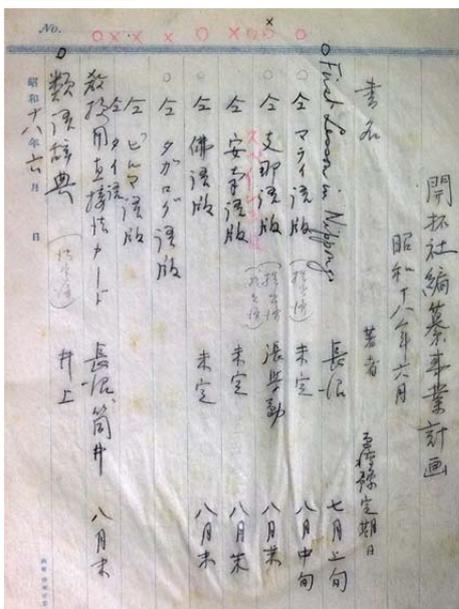
### 参考2 前書き (パーマー自筆原稿)



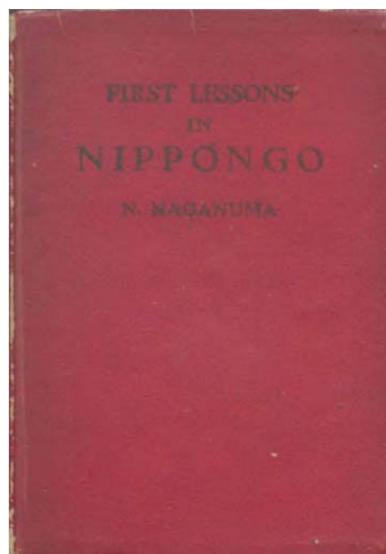
### 22 『標準日本語讀本 卷一』 長沼直兄 昭和6年



### 参考3 出版計画書 (長沼直兄自筆)



### 23 『FIRST LESSONS IN NIPPONGO』 N.NAGANUMA 昭和21年



ケース3の解説に触れたように、長沼直兄は日本語教育振興会において「東亜の共通語」としての日本語普及事業にかかわる以前は、パーマーの傍らで英語教育の教材開発、語彙調査に従事しながら、米国大使館の日本語教員を務めていた。日本語の情報を自由に得る能力を持った日本語の専門家を養成するプログラムの一環で、教養ある日本人と同等の日本語力を養成すべく入門からデザインされた『標準日本語讀本』全七巻は、米国大使館での実践から生まれた入門から超級に至る体系的な教科書である。欧米人を対象とした一人の著者によるものとしては、空前絶後のものであるといっても過言ではない。『巻一』(22)にはパーマーによる4ページにわたる英文の「前書き」がある。前頁に掲載してある鉛筆書きは、パーマーによるその自筆原稿である。

『First Lessons in Nippongo』(23)は、長沼直兄が日本語教育振興会の仕事をしている時期に、それとは別に作成した英語による日本語教材で、初版は1945年2月に刊行された。1942年9月から1943年10月にかけて現在のJapan Times社による英文週刊誌『Nippon Times Weekly』に連載された日本語学習欄をまとめたもので、全50課で日本語の基本文型が学べるようになっている。東亜の英語話者が対象だと説明されていた。

この本は戦後間もない1946年2月に同じ紙型を用いて再版された。この時点では対象学習者は、アメリカ人を主とする連合軍関係者であった。同書は1952年に一部改訂され『First Lessons in Japanese』と書名も改まるが、その後1990年代まで版を重ねた。前頁は、戦時中の長沼直兄による自筆の出版計画である。この本の、マライ語版、中国語版、スペイン語版、ベトナム語版、フランス語版、タガログ語版、ビルマ語版、タイ語版の出版が計画されていたことが、このメモによってわかった。

## ケース6

『標準日本語讀本』(1931-1934)全七巻の初版は、米国大使館内部での使用に限られたため、外部の目に触れることはなかった。やがて日米関係が悪化すると、米国大使館での日本語教授も存続不能となった。1941年8月、長沼直兄は米国大使館を辞し、文部省内に新設された日本語教育振興会に活躍の場を移したのだった。

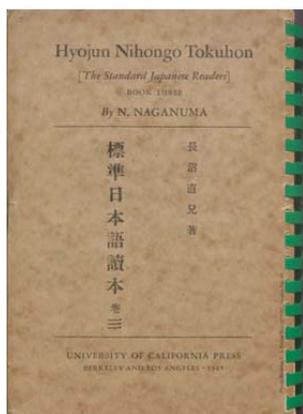
一方、米国大使館で長沼直兄に日本語を習った人々は、長沼の教科書を米国に持ち帰った。日本語のわかる人材はアメリカ陸海軍にとって必要で、最上の教材として長沼直兄の『標準日本語讀本』全七巻が選ばれた。長沼直兄の知らぬうちに、米国でコピー版が何種類も作られた。日本文学者のドナルド・キーン、サイデンステッカーらもこれで学んだ。(24)はカリフォルニアで出版されたもので表紙は異なるが、中身は全くのコピーである。そればかりか、長沼直兄の配布プリントに基づく副教材(25)も印刷された。

さて、そうした事情もあって、戦後日本にやってきたアメリカ人将校らの中で、長沼直兄は広く知られていた。日本語教育振興会が戦争目的の団体であったにもかかわらず、彼らは長沼直兄を頼って日本語教育振興会に日本語教授を要請、日本語教員養成講座も連合国軍の依頼によって実施された。

連合国軍の日本語教室で、長沼直兄は、『改訂標準日本語読本』の作成に着手、右から二点目(26)は1948年に刊行された非売品である。米軍は戦争中無断で使った代わりにと行って長沼の教材への費用負担を惜しまなかったという。漢字カードを含む教材一式がこのときに完成された。1950年には開拓社から一般市販用に刊行され、その後、長く版を重ねた。右端(27)は、改訂版に基づいてモンレーの米軍語学校で作成された教材である。編者はキハラ・シゲヤ(1914-2005)。戦中戦後を米軍で教えた日系二世である。

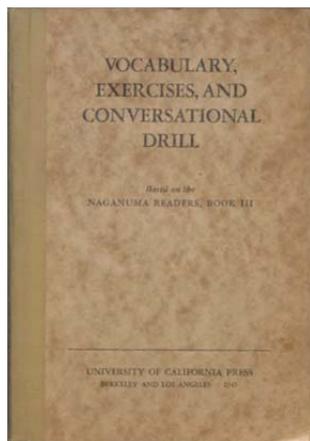
24

『標準日本語読本 巻三  
私家複製版』  
長沼直兄 1945



25

『VOCABULARY,  
EXERCICES, AND  
CONVERSATIONAL  
DRILL』  
長沼直兄 1945



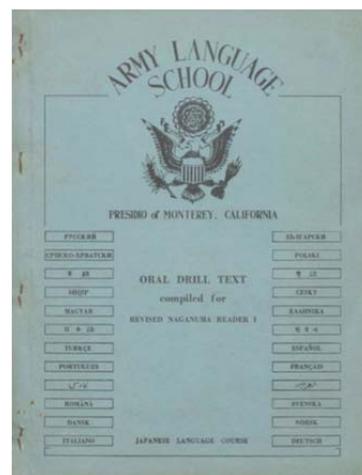
26

『改訂標準日本語読本巻一』  
長沼直兄 1948



27

『ARMY LANGUAGE  
SCHOOL』  
MR KIHARA, ASST CHMN  
昭和 28 年



## ケース7

このケースには、長沼直兄が直接かかわったのではない、同時代の日本語教材やその指導書を並べた。次頁の『ニッポンゴ ノ ハナシカタ』(28)は1942年に刊行された南洋協会による東南アジア諸国向けの教科書である。南洋協会の結成は、1915年にさかのぼる。が、これらの地域で日本語普及が本格的に推進されるのは、太平洋戦争が始まってからのことである。『ニッポンゴ ノ ハナシカタ』の表紙裏には「アジヤジンワ ミンナ ニッポンゴデオハナシ シマショー」とあって、当時の日本語普及政策の勢いが伝わってくる。日本語でのコミュニケーション活動が中心で、教師用指導書(29)にもそれを目標とした指導法が書かれている。現在でいうコミュニカティブ・アプローチを思わせる。

南方向けのNHKラジオ日本語講座のテキスト(30)は、表紙に大きなラジオと日本の象徴としての桜や富士山がきれいな色で刷られている。

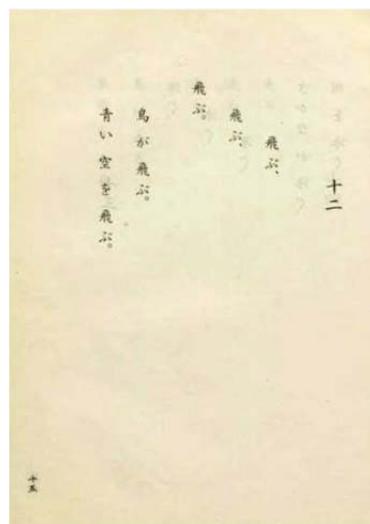
(31)は、同じころに発行された国際文化振興会による日本語教科書である。国際文化振興会は、現在の国際交流基金の前身で、1934年に創立された。当初は欧米独立国を対象とした日本文化紹介を主としており、この読本の編纂計画にあたっては欧米人の意見に耳を傾けた。日本語は読み書きのために学ぶのであって、話す必要性は低いというのが彼等の意見で、それを指針として作成されたのがこの『日本のことば』(31)である。上・中・下の三部構成として計画されたが実際に刊行されたのは「上」だけであった。

視覚的、聴覚的に美しい日本語を紹介することに力点がおかれており、学習者には日本語の文化を理解してもらいたいが、日常生活で使ってもらおうとは考えない、といった姿勢がうかがえる。教師用の指導書は本文の鑑賞の仕方、そこに込められた思想の解説に終始しており、長沼直兄による『ハナシコトバ』の指導書(2)とは好対照をなしている。

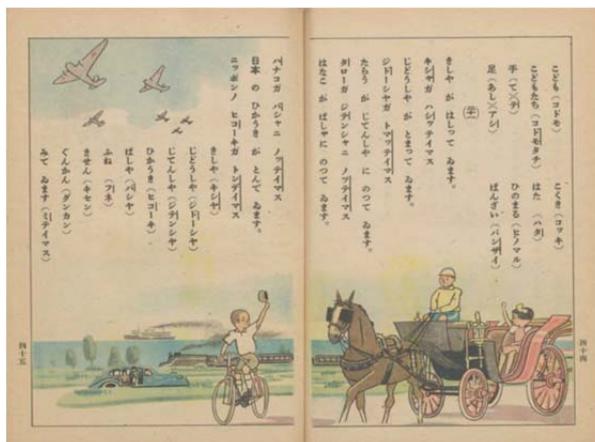
**28** 『ニッポンゴノハナシカタ』  
財団法人南洋協會 昭和17年



**31** 『日本のことば 上』  
国際文化振興會 刊行年不明



**30** 『にっぽんご』日本放送協會 昭和19年



『標準日本語讀本 卷一』ハロルド・E・パーマーによる序文の原稿（最後の部分）

（翻訳：河路）

私はこの原稿を、ことばの通じないロシア旅行の途中で書いています。ロシア語の初歩的な知識を得ようとして時間を過ごしています。最低でも「わかりません」とか「あなたは英語を話しますか」とか、「手を貸してくださいますか？（原文：日本語）」とか「これで よう ございますか（原文：日本語）」「はい、どうぞ（原文：日本語）」といったことを表現できるようになりたいものです。

会話や文法、簡単な方法を教えるさまざまな教科書や手引書が私の前にあり、それを私はひっきりなしに繰っているのです。やればやるほど、ああ長沼直兄のような人がロシアにもいて、『標準日本語讀本』のロシア語版を作ってくれたらいいのに、と思う気持ちが強くなります。それさえあれば、目の前のどこからとっかかりを得たらよいかかわからない雑多な教材の類の代わりに、ロシア語への正しい道筋が示されることでしょう。

今日、必要なのは、切実に必要なのは、正しい方法による外国語の生きた教材です。日本語を学ぶみなさんは、経験豊かな専門家（専門家でしたっけ？ちょっと確認してください）、長沼氏の努力のおかげで、正しい方法による日本語の生きた教材を手にすることができて幸せです。

ハバロフスクにて

1931年6月9日

文部省英語教授アドバイザー

ハロルド E. パーマー

#### 【解説】

ハロルド E. パーマーは 1922 年に来日、1923 年に文部省内に設立された英語教授研究所の所長となった。長沼直兄はその研究員として全国での講演、教科書作成、NHK の英語放送などパーマーの傍らで共に仕事をした。

パーマーは長沼直兄を米国大使館の日本語教官に推薦、長沼直兄の言語教育者としての資質を高く評価していた。『標準日本語讀本』はその成果であり、書名にもパーマーと共に編纂し 1926 年に完成した『The Standard English Readers』の影響が明らかで、パーマーとの縁は深かった。1936 年に帰国するまで、パーマーは日本で上記の職にあった。

旅の途中で書かれたからか、英語教育の第一人者であったパーマーが、手書き原稿の最後の部分、「practitioner（専門家）」と書いて「〈practitioner〉かもしれない、スペリングが心配だ」というようなメモを書いている。印刷された「序文」ではもちろん削除されている。また、署名のあとの肩書きに「Linguistic Adviser to the Department of Education」とあるが、印刷された序文では「Department」の前に、「Japanese」が挿入されており、日本の文部省であることが説明されている。文部省の英語教授研究所の所長であったことを指しているものと思われる。1931 年 4 月には本学の前身、東京外国語学校に「Teacher Training Class」を編成し、講師を務めたと伝えられているが、この序文原稿によると、パーマーはその 6 月にロシア旅行の途中、ハバロフスクでこれを書いているとある。詳しい事情は不明である。

## 長沼直兄 年譜

(年齢は誕生日後の満年齢) 作成：河路

西暦(元号)	年齢	事跡 (*印は関連事項)
1894(明治 27)	0	11月16日 群馬県伊勢崎市近郊に長沼宗雄の三男として誕生
1915(大正 4)	21	6月、東京高等商業(一橋大学の前身)入学
1919(大正 8)	25	3月、同校卒業
1921(大正 10)	27	10月、2年近く勤務した貿易商社を横浜支店閉鎖を機に退職、自宅で勉強中に、隣人のアメリカ人宣教師に頼まれて日語学校の臨時教師となる。 同年、アーサー・ローズィニス(Arthur Rose-Innes)と知り合い、同氏の漢字辞典の全面改訂に協力。
1922(大正 11)	28	5月ごろ、文部省語学顧問ハロルド・E・パーマーの東京高等師範学校における連続講演に出席。これが機縁となり親交を結ぶ。この時よりパーマーの英語教育における教授法を日本語教育に取り入れる。 11月、アントネット・ファルキーと結婚。(アントネットは後に長風社代表として長沼直兄の著書の出版にあたる)
1923(大正 12)	29	5月 文部省内に英語教授研究所(The Institute for Research in English Teaching)設立、パーマー所長に就任、長沼直兄は幹事に就任。(パーマーは1936年まで在任、全国での講演、教科書作成等のほか、長沼直兄とともにNHKの英語放送を開始するなど、多方面で活躍。) 9月 関東大震災で日語学校、焼失。同校の神戸移転を機に退職。 10月 パーマーの推薦で米国大使館日本語教官に就任
1925(大正 14)	31	1月 秩父宮殿下が4月より2年間、世界各国の視察に外遊することとなり、長沼直兄、パーマーとともに英語のご進講を行う。 同年、パーマーの英語教科書作成に協力、『The Standard English Readers for Beginners』に引き続き、『The Standard English Readers』の材料収集、「那須与一」などの英訳を担当。
1927(昭和 2)	33	協力してきたパーマー著『The Standard English Readers』(全5巻)完成。
1928(昭和 3)	34	長沼直兄、パーマーの意を体して『構造的英文法』『構造的文法解説』『初等英文構成練習書』(日本語)を執筆。(同年、パーマーの著作として刊行) 12月、(株)開拓社の取締役就任。英語教育、日本語教育関連の出版社。
1930(昭和 5)	36	かねて米国大使館で試用中の自作テキストをもとに『標準日本語読本』シリーズに着手。
1931(昭和 6)	37	『標準日本語読本巻一』刊行。1934年にかけて全7巻の刊行完成。和綴じ布表紙の上製本と、洋綴じ上製本の2種。(戦時下のアメリカ陸海軍で使われナガマの名を広めることになる)
1939(昭和 14)	45	文部省より7月に臨時日本語教科書編纂の嘱託、12月に図書局事務の嘱託を受ける。
1940(昭和 15)	46	6月興亜院より中国蒙疆方面の日本語教育事情視察のため出張を命ぜられる。
1941(昭和 16)	47	8月 米国大使館首席教官を辞任。文部省内に「日本語教育振興会」が設立されるにあたって理事に就任。
1942(昭和 17)	48	4月、東京女子大学講師、特設予科で日本語授業を行う。9月、「日本語教育振興会」理事兼研究部主事に就任。南方派遣教員養成所で教授法を担当、外地向け教材作成に携わる。10月、『ハナシコトバ』『同学習指導書』刊行。12月財団法人 日本語教育振興会常務理事兼総主事に就任。
1943(昭和 18)	49	陸軍省、文部省の関連懇談会等に多く出席。文部省南方派遣日本語教育要員養成所講習会で「日本語教授法概説」を担当。12月 大東亜支那事務局事務を委嘱される。

1944 (昭和 19)	5 0	東京女子大学講師辞任。3 月、「財団法人日本語教育振興会」認可に伴い、常務理事文部省囑託に。教材に関する関係官庁連絡会議に教科書編纂委員長として出席。8 月、大東亜省囑託にも就任。
1945 (昭和 20)	5 1	2 月『First Lessons in Nippongo』刊行。7 月 大東亜省囑託を解かれる。 10 月 米軍の依頼により米軍将校に日本語を教え始める。 12 月『Everyday Words and Phrases』(英語会話語彙)刊行、三省堂 10 万部 日本語教育振興会理事長に就任、解散を決定。
1946(昭和 21)	5 2	3 月 連合国軍将兵に対する日本語教授者講習会にて特別講義を担当。「言語文化研究所」創立。理事長に就任 4 月 米第八軍「アーミー・カレッジ」教官に就任。 7 月 外務省・文部省共管「財団法人言語文化研究所」設立許可。
1947(昭和 22)	5 3	1 月 米軍総司令部顧問に就任、参謀第二課日本地区語学科主任に就任
1948(昭和 23)	5 4	4 月 在日宣教師団・在日外国人有志の要請により財団法人言語文化研究所「附属東京日本語学校」を開校、校長に就任。『標準日本語読本』の全面改訂を進め、全 8 巻を刊行 (非売品)。軽井沢分校開設。
1949 (昭和 24)	5 5	中国から総引き上げの宣教師の大量入学など学習者急増のため千代田区神田と港区芝に分教場。野尻分校開設。
1950 (昭和 25)	5 6	第一回「日本語教師養成講習会」その後毎年夏に行われ回を重ねる。 『改訂標準日本語読本』シリーズを開拓社より一般向けに刊行。
1952 (昭和 27)	5 8	6 月 渋谷区の現在地に新校舎完成、移転。 7 月 講和条約発効、米国大使館日本地区語学校語学主任となる。 『First Lessons in Japanese』刊行。『Practice Book Vol.1 Part 1』(このあと続刊、1965 年に『Vol. Ⅲ』)
1954 (昭和 29)	6 0	日本語教師養成講習会の修了者による「日本語教師連盟」発足。
1956 (昭和 31)	6 2	欧米の外国語教授の実態視察。
1957 (昭和 32)	6 3	健康上の理由により校長を退職。釘本久春理事、校長事務取扱となる。
1958 (昭和 33)	6 4	視聴覚部を設けて視聴覚教育の研究・教材開発に着手。
1961 (昭和 36)	6 7	6 月 米国大使館日本地区語学校語学主任を辞任
1962 (昭和 37)	6 8	校長に復職。森清と共著で『Practice Japanese』、同 LP レコード 3 枚
1964 (昭和 39)	7 0	3 月 東京日本語学校校長を辞任。名誉校長となる。『改訂標準日本語読本』巻 1 より巻 5 までの再訂を始める。(1967 年、「巻 5」刊行により完成)
1965 (昭和 40)	7 1	11 月 3 日 勲三等瑞宝章を受ける。
1966 (昭和 41)	7 2	軽井沢分校を閉鎖。夏の日本語教師講習会は以後、渋谷の本校で 1985 年度まで実施。
1968 (昭和 43)	7 4	6 月 言語文化研究所理事長辞任。理事となる。
1973 (昭和 48)	7 9	2 月 9 日 心筋梗塞にて逝去。2 月 23 日 正五位を贈られる。 実弟、長沼守人、言語文化研究所 理事に就任。

#### 参考文献

河路由佳編 (2009)「創立者 長沼直兄 (1984-1973) 年譜」『東京日本語学校開校 60 周年記念誌』(財)言語文化研究所附属東京日本語学校  
(財)言語文化研究所 (1981)『長沼直兄と日本語教育』開拓社

## 展示資料一覧

資料名	請求記号
ケース 1	
1. 『ハナシコトバ 上』 文部省 昭和 16 年(?)	日教資/1/1
2. 『ハナシコトバ 中』 文部省 昭和 16 年	日教資/1/2
3. 『ハナシコトバ 下』 文部省 昭和 16 年	日教資/1/3
4. 『日本語教科用 ハナシコトバ学習指導書 上』 文部省 昭和 16 年	日教資/1/4
5. 『日本語讀本 卷二』 日本語教育振興會(代表者 長沼直兄) 昭和 17 年	日教資/1/11
6. 『日本語讀本學習指導書 卷二』 文部省 昭和 18 年	日教資/1/16
ケース 2	
参考 1. 『ハナシコトバ』 レコード	
7. 『点訳版 (日本語教科用) ハナシコトバ 上』 文部省 昭和 18 年	日教資/1/7
ケース 3	
8. 『コドモノセカイ』 作画：黒崎義介 昭和 17 年	日教資/1/46
9. 『ニッポンノタデモノ』 作画：鈴木寿雄 昭和 17 年	日教資/1/47
10. 『ガクカウ』 作画：山本日子士良 昭和 17 年	日教資/1/49
11. 『日本文化讀本 年中行事』 日本語教育振興會 昭和 17 年	日教資/1/29
12. 『日本文化讀本 大學の學生生活』 文部省 昭和 17 年	日教資/1/30
13. 『日本文化讀本 さくら』 文部省 昭和 17 年	日教資/1/31
ケース 4	
14. 『ニッポンゴ (半島マレー)』 情報局 昭和 17 年	日教資/1/44
15. 『ニッポンゴ (タガログ語)』 情報局 昭和 17 年	日教資/1/43
16. 『學習日本語ジャワ篇 1』 文部省 昭和 19 年	日教資/1/33
17. 『學習日本語フィリピン篇 1』 文部省 昭和 19 年	日教資/1/40
18. 『學習日本語ビルマ篇 1』 文部省 昭和 19 年	日教資/1/36
19. 『學習日本語ビルマ篇 2』 文部省 昭和 19 年	日教資/1/37
20. 『學習日本語マライ篇 1』 文部省 昭和 19 年	日教資/1/38
21. 『學習日本語マライ篇 3』 文部省 昭和 20 年	日教資/1/39

## ケース 5

参考 2. 『「標準日本語讀本」直筆序文原稿 1931-1934』

22. 『標準日本語讀本 卷一』長沼直兄 昭和 6 年 日教資/5/1

23. 『FIRST LESSONS IN NIPPONGO』N.NAGANUMA 昭和 21 年 日教資/5/20

参考 3. 『振興会関係通信複写簿重要書類』長沼直兄

## ケース 6

24. 『標準日本語讀本 卷三 私家複製版』長沼直兄 1945 日教資/5/11

25. 『VOCABULARY, EXERCICES, AND CONVERSATIONAL DRILL  
Based on the NAGANUMA READERS, BOOKIV』長沼直兄  
1945 日教資/5/17

26. 『改訂標準日本語讀本 卷一』長沼直兄 1948 日教資/5/21

27. 『ARMY LANGUAGE SCHOOL (ORAL DRILL TEXT compiled for  
RAVISED NAGANUMA READER I)』  
MR KIHARA, ASST CHMN 昭和 28 年 日教資/5/29

## ケース 7

28. 『ニッポンゴノハナシカタ』財団法人南洋協會 昭和 17 年 日教資/3-8/5

29. 『ニッポンゴノハナシカタ 教師用』財団法人南洋協會 昭和 17 年 日教資/3-8/6

30. 『にっぽんご』日本放送協會 昭和 19 年 日教資/3-8/9

31. 『日本のことば 上』国際文化振興會 刊行年不明 日教資/2-4/1

32. 『日本のことば 上 (教師用書)』国際文化振興會 昭和 18 年? 日教資/2-4/2

## 長沼直兄(1894~1973)

叙勲に際して  
昭和 40 年 11 月



【展示協力】

学校法人長沼スクール 東京日本語学校  
本学国際日本研究センター